

乃木將軍を挽す

杉浦重剛

赤城の熱血余瀝を存し

松下の遺風不言に伝う

心事明明還白白

神州の正氣君に頼つて尊し

【作者】杉浦重剛（一八五五～一九二四年）・明治・大正時代の教育家。近江膳所藩の儒者・杉浦重文の次男として生まれ、十六歳のとき藩の貢進生として大学南校（東京大学の前身）に入り英学を修め、二十二歳で英国に留学、化学を研究したが、在英五年ののち病で帰国。その後大学予備門の校長、文部省参事官などを歴任。この間東京英語学校を創立、また新聞記者となり、雑誌「日本人」の発刊に尽力し、欧化主義に反対して日本主義を唱えた。外相大隈重信の条約改正案を批判して反対運動を起こした。滋賀県選出の代議士となつたが一年で辞し、国学院大学・東宮御学問所などに勤めたが、大正十三年七十歳で病没。人格高潔・識見卓抜、偉大な教育家であり、一世の師表として仰がれた。

【語釈】*挽…死を悼んで詩歌を作ること。元は葬儀の棺を乗せた車を曳く時に歌つたうた。輓歌。*赤城熱血…切腹した赤穂四十七士の忠烈をいう。

*余瀝…後に残したしずく。今も残る影響。將軍の体内に忠義の精神を残し、將軍は君の為に切腹している。もとは杯の酒などの余つたしずくを云い、転じて人の恩恵に例える。*松下遺風…松下村塾の吉田松陰の影響。*伝不言…教えなくても自然に伝わる。

*心事…心に思う事柄。心中の考え。*明明還白白…きわめて明白で、純粹ではっきりしている「白」もあきらか。*神州…神国。わが国の美称。*正氣…万物の根源である純粹な氣。粹な氣。

【通釈】乃木將軍は赤穂浪士割腹の屋敷に生まれ、その影響を受けて育つた。青年期には、伯父・玉木文之進から松下村塾の教えを受け、その感化により勤皇の志が厚かつた。明治天皇に殉じて自殺を遂げたがその心中は誠に明明白白で、至誠純忠以外の何物でもないのである。わが神国日本に存在する正氣の尊嚴が、將軍の殉死によつてはつきりと世に示されたのである。

【解説】この詩は作者が純忠無比の武人として敬重していた乃木將軍が、大正元年9月23日、明治天皇御大葬の夜、これに殉じて自刃したのを痛惜して作つたものである。